疎まれながらもたくましく

渡邊　久仁子(教育・昭和 46 年卒)

最近の新聞広告に団塊の世代のことが大きく掲載されていました。その内容に思わずニヤリとしてしまいました。私はまさしく団塊の世代を生きてきたからです。

高校生の時、恩師から「女性が男性と対等に意見を言うには、経済的に自立することが必要ですよ。」と教えられ、初めて自分の将来のことを考えるようになりました。その当時は、女性が職業に就く場合、医者か看護師か教師かと、数えるぐらいでした。

私は消去法で、「でもしか先生」になれたらと教育学部に入学しました。「でもしか先生」とは、その当時の流行語で「先生にでもなろうか。先生にしかなれない。」と言う意味で使われていました。

入学した当時は、若者の熱量が高い時代で、大学紛争の渦中にあって大学占拠のニュースが日本中を駆け巡っていました。香川大学も例外ではなく、学生たちは反戦デモや集会に力を注ぐ日々でした。しかし 3 回生の頃には沈静化し、私たちは坂出附属小・中学校の教育実習に行くことができました。そして、私にとってこの体験が絶対に教師になりたいと言う決意のスイッチとなりました。附属の先生たちとの出会いにより、授業を創っていく楽しさと厳しさ、また、子どもたちのキラキラした瞳の輝きや落胆する姿、それは驚きと発見の日々でした。教師と言う職業は、日々新たで素晴らしい仕事だと実感しました。

当時は香川県の教師、採用人数が少なく、なんとか採用されたものの、職場には先輩がほぼいなくて、悪戦苦闘の日々でした。妊婦ながら体育主任をし、30 歳の頃には後輩が大勢採用されてきました。すると、私は若年から中堅教師扱いとなり、毎年 4 歳ほど歳をとっていく感覚でした。

教師になって 38 年間、厳しいこともあったけれど、充実した日々を過ごすことができました。退職して 14 年が過ぎましたが、今もこども園や中学校で絵本の読み聞かせをしています。子どもたちの反応は、いつの時代も変わらず、心に響く話は全身で聞いてくれます。

冒頭の新聞広告に戻りますが、『かつてこんなにも疎まれながら、たくましく生きてきた世代があったろうか。』と、書かれています。

私は、教師として生き抜いてきて本当に良かったと思っています。